

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 6 日現在

機関番号：32718

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530933

研究課題名（和文） 大学全入時代に即した高校と大学の「教育接続モデル」の研究

研究課題名（英文） The Study on Articulation between Secondary School and University

研究代表者

佐藤 智美（SATO SATOMI）

東洋英和女学院大学・人間科学部・教授

研究者番号：80240076

研究成果の概要（和文）：本研究では、カナダ・オンタリオ州の中等教育と大学との接続関係を調査、分析することにより、日本の大学入学のあり方を再考し、大学全入といわれる時代の高校と大学の接続について提言することが目的である。オンタリオ州では、大学入学試験はなく、大学への進学は、中等学校において大学進学コースで大学進学のために条件とされている科目を履修し、その成績も定められた基準を満たさなければならない。すなわち、大学進学は中等学校での履修状況に左右される。中等学校卒業後の進路選択は、本人の意志、家族の希望のほか、学校のカウンセラーの助言が重要な情報源となって決定されるが、大学入学後の専攻変更は頻繁に行われる。また、中等学校卒業時に大学進学を希望しない場合であっても、職業経験を経て、大学への進学を実現することが可能である。さらに、経済的、社会的に大学進学から排除されがちなリスク生徒に対しても、大学進学の可能性をひらき、実現に向けて支援する仕組みが構築されつつあり、出身背景に影響されない大学進学の途が整備されつつある。このような高大接続のあり方は、大学入学試験や、それに関連した出身背景に影響される現代の日本に関して、中等学校と大学での学びを接続し、変更や修正を可能にする高大接続の可能性を示唆している。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to review the articulations between secondary school and university, and to propose a model of the desired connection between them. The articulation between the two learning stages in Ontario, Canada was investigated, and it was clear that students make decisions based on their school subjects and records after secondary education, and no entrance examinations are required to be admitted into university. Students in Ontario are given opportunities to pursue their study at university, regardless of social and economical background. These educational paths are realized through the articulations between secondary school and university without depending on entrance examination.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2010年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 2011年度 | 1,200,000 | 360,000 | 1,560,000 |
| 2012年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,200,000 | 960,000 | 4,160,000 |

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学、教育社会学

キーワード：大学入学、高大接続、カナダ、オンタリオ

1. 研究開始当初の背景

わが国の高等教育（大学、短大）進学率は、2007年度には50%を越え「大学ユニバーサル時代」を迎えるとともに、収容力との関わりから希望者がほぼ大学に入学できる「大学全入時代」を迎えている。そこでは、学校システムの量的構造の変化により、かつては入学試験により高校と大学の接続関係をつけることができたが、もはや「入学試験」によって高校と大学との接続をつけることが困難になっている。従来の選抜（入試選抜）に替わる新しい接続方式を創り上げることが喫緊の課題なのである。

本研究は、このような状況の下で、a. 荒井・橋本（編）『高校と大学の接続』（玉川大学出版部、2005）、b. 「大学ユニバーサル化時代に対応した新しい高大接続モデルの構築」（平成19年度～21年度基盤研究、研究代表者 佐藤智美）の研究成果を継承・発展させようとするものである。

a 『高校と大学の接続』においては、大学の収容力が小さいころには大学への受験競争が教育の牽引力の役目を果たしていたが、高等教育に多くの人々が接するようになった今日、初中等教育の中身を確かなものにし、高校と大学の関係から大学入試を考えることが肝要になってきているとの問題意識の下に、教育を充実させるステップとしての入試選抜に代わる新しい形態を「教育接続」と呼び、それはどのようなシステムなのかを、各国の高校と大学の接続問題から探索したものである。具体的には、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、韓国、タイ等の接続改革が研究されている。

b 「大学ユニバーサル化時代に対応した新しい高大接続モデルの構築」の研究では、a のこのような問題意識・成果を受け、a においては、あまり意識されていなかった「各国の中等教育の歴史的発展段階とその位置づけという観点」（佐藤・山村2006「接続研究の今日的課題とカナダの教育および大学入学システム」『大学入試センター研究開発部リサーチノート』RN-06-06、1-3頁）から、a においては研究対象とされていなかったオーストラリアとカナダの接続システムを研究対象として設定した。ここで、「各国の中等教育の歴史的発展段階とその位置づけという観点」とは、以下のようなものである。各国の初等・中等教育の歴史的発展との関わりから見れば、中等教育と高等教育の接続に関する制度設計は、当然のことながら、一様ではないと考えられる。たとえばドイツやフランス、イギリスな

どでは、中等教育はもともと高等教育への「予備課程」として中産階級のためのものとして位置づけられてきた。その一方で、これらの国々では、初等教育は、一般大衆の子どもを対象として、中等教育との接続が位置づけられてこなかった。とりわけ、ドイツやフランスでは、中等学校卒業（資格）が大学入学資格として位置づけられていた。したがって、このように中等教育に限られた者のみを対象としている限り、基本的に「高大接続問題」は、制度設計の観点からは、存在していなかった。それゆえ、今日、後期中等教育および高等教育の進学率の上昇とともに、従来のアビトゥーア（ドイツ）やバカロレア（フランス）といった、中等学校卒業（修了）資格試験＝大学入学資格試験という、複線型の中等教育制度に基づく試験・制度を、いかに現状に対応するように改変するか、が課題となっているのである（荒井・橋本 2005）。

かかる状況下でわれわれが目にしたのは、中等教育が中産階級のためのものとして位置づけられてきたような歴史的伝統が相対的には弱く、基本的には、単線型の初等・中等教育をとる国々での、よりスムーズな高大接続の制度設計の可能性である。なお、上記の荒井・橋本(2005)では、単一型の中等教育制度であるアメリカのオレゴン州の接続改革の例（PASS システム）を分析している。同事例はプランとしては優れたものではあるが、その「壮大な実験」（189頁）の、いまのところの「普及度」は「思わしくない」（173頁）。

2. 研究の目的

われわれはこれまでに、「教育接続」の先進的事例としてのカナダ・オンタリオ州とオーストラリア・クイーンズランド州の大学入学者選抜システムに注目し、それらのシステムの調査・研究を3年計画で進めてきた。カナダに関しては、オンタリオ州を対象にして、訪問調査を実施し、中等教育政策、大学進学手続き、大学における入学者選抜のプロセスについて把握した。その結果、1) オンタリオ州においては、入学試験は実施されず、中等学校の成績に基づいて入学者を選抜するのが大学入学者選抜制度の大きな特徴であること、2) そのために州内での中等学校教育の成績評価のためシステムが整備されていること、3) 中等学校内でのコース分化（大学準備やあるいはカレッジ準備、就職準備など、進路別の教育内容の科目を提供）の方式をとっており、大学進学のためには、大学進学準備のためのコース（科目）を履修しなければならないこ

とが明らかになった。

また、オーストラリアに関しては、クイーンズランド州を対象にして、これまでに訪問調査を実施し、中等教育カリキュラムの内容および中等教育政策、大学進学手続き、進路選択過程、大学における入学者選抜のプロセスについて調査・研究を行った。訪問調査の結果、1)入学試験は実施されず、中等学校の成績に基づいて入学者を選抜するのがクイーンズランド州の大学入学者選抜制度の大きな特徴であること、2)そのために州内での中等学校教育の成績評価のためシステムが整備されていること、3)さらに中等学校内での進路選択過程における指導・支援が重要であること、が明らかになった。

なお、カナダ・オンタリオ州、オーストラリア・クイーンズランド州とも「教育接続」の観点からとりわけ二つの重要な要素を掘り下げて調査・研究を進めたい。

(1) 第一に、教育評価システム(中等学校成績評価システム)の詳細な分析を行う。中等学校の成績を大学入学者選抜に使うためには、各科目に関する州内での統一的なシラバスおよび成績評価のシステムが不可欠である。シラバスの作成・成績評価の手続きに関する情報を収集し、詳細な分析を行うことが課題となる。さらに、クイーンズランド州においては、中等学校成績尺度化のためのQCS

(Queensland Core Skills) テストが制度化されている。このQCS テストの作成方法・過程、および、QCS テストを利用した尺度化の方法について明らかにすることも課題である。

(2) 第二に、進路分化・選択システム、より広くはキャリア教育のシステムを詳細に明らかにすることとともに、二つの州の中等学校における進路選択システムの意義・問題点等を含めて調査・分析することが課題となる。

なおこれまでの訪問調査により、クイーンズランド州の進路分化・選択システムはオンタリオ州のそれをモデルにしていることが明らかになったので、この点も重視しながら調査研究を進める。

3. 研究の方法

今回の研究においては、インターネットを通じた資料収集、分析と訪問による聞き取り調査が主な研究方法である。

(1) 資料収集・分析

オンタリオ州教育省、オンタリオ大学志願センター(OUAC)等を対象として、オンタリオ州の中等教育段階の成績評価システム、進路指導システム、大学入学者選抜制度等に関して、文献とインターネットによる最新の情報収集を行い、「教育接続」という観点から分析した。

(2) 訪問・聞き取り調査

① オンタリオ州教育省

同省を訪問し、現行の「オンタリオ中等教育修了証書(OSSD)」と中等学校における履修科目の成績を、学力に関する主な選抜資料とする大学入学者選抜方式の意義、課題について聞き取り、資料収集と分析を行った。

② 中等学校

ピール教育委員会管轄の2つの中等学校(フレッチャーズ・メドウ中等学校、スティーブン・ルイス中等学校)において、生徒の進路選択過程への教職員の関わりについて聞き取り調査を行った。さらに、スティーブン・ルイス中等学校では、4人の生徒から大学進学と進路選択過程について話を聞く機会を得た。また、カウンセラーからは、生徒に対する進路選択に関する支援の実情について情報を得た。

③ ピール教育委員会

同教育委員会では、移民の生徒やリスク生徒の大学進学をも含めた進路選択肢の拡大と実現のための取り組みや支援の実情について聞き取りを実施した。また、OYAP(Ontario Youth Apprentice Program)という徒弟制度の職業訓練とその実情についても理解を深めることができた。

④ トロント大学、マギル大学

これら2つの大学のアドミッションセンターにおいて、志望者の合否判定の基準の意義と課題、大学生活について聞き取りを行った。

4. 研究成果

(1) オンタリオ州の中等学校では、中等学校卒業後の4つの進路である、大学進学、カレッジ進学、職業訓練、職場(就職)のどれを生徒が選択したとしても、その実現に向けた支援が重視されている。今回の調査では、ピール教育委員会が管轄するフレッチャーズ・メドウ中等学校とスティーブン・ルイス中等学校を訪問し、そこでの生徒の進路選択過程に、どのように教師はじめ学校スタッフがかかわり、支援を提供しているかを理解することができた。ピール地区は移民を多く受け入れている地区であり、2つの中等学校とも移民の生徒が多く通学している。学校の中で聞かれる言語の種類は数十に及ぶ。そのような多文化を学校教育に生かしつつ、さらに、オルタナティブ・プログラムやコープ・プログラムでは、生徒の将来のキャリアを見据え、実際の職場体験を組み込んで、生徒を卒業へさらに、その後の進路へと導くことに成功している。また、学校生活から落ちこぼれそうな生徒に対する支援プログラムの開発に力を入れている。たとえば、コープ・プログラムでは、このプログラム修了者で、社会で成功している先輩を招き、学校で講演、説明会をしてもらっている。このような機会に、生徒は、実社会へと続く進路選択もありうること

、そして大学進学への道は労働経験を経て以降もありうることを知ることができ、特にリスク生徒がそのような知識を得る試みはキャリアを考える上で有効であるとのことであった。高校中退者が増加しつつある日本の教育を考えるうえでも参考になった。

また、スティーブン・ルイス中等学校で出会った生徒からは、どこの大学でどのような勉強をしたいかを決めることはそれほど容易ではなく、決心するまでには時間が必要であるだけでなく、変更することも多いことを学んだ。カナダの高校生にとっても、日本の高校生と同様に、進路決定は必ずしも容易ではない。進路選択の判断、決断は親の意見も参考にするが、それ以上に参考になり、頼りにされているのが学校のカウンセラーである。数人いるカウンセラーのうち、生徒によっては特に信頼されているカウンセラーがおり、カウンセラー室で交わされる会話には生徒にとって、有益な助言が含まれている。また、カウンセラーは生徒の自主性、自発性を重視しつつ、生徒との信頼関係を基礎とした的確な助言を提供できるように努めていることがわかった。

(2)教育省では、現在の大学入学のための仕組み、政策について、また現在のような高校時代の成績が重視されるようになった経緯について聞き取りをした。さらに、教育省において、OYAPに関する情報も得ることができた。ピール教育委員会では、主としてOYAPの実施と発展に関わる資料と情報を収集した。ピール教育委員会では、特に学業成績が不振になりがちな、あるいは落ちこぼれる危険性のあるリスク生徒を社会にうまく接続する道筋の1つとして、OYAPは重要な選択肢と見なされている。そのような生徒が職業生活を軌道に乗せた後に、動機も高まり、大学に進学するということもあり、高校と大学の間に職業をはさんだ大学への進学へのあり方となっていることが分かった。

OISE(Ontario Institute for Studies in Education)では、長年、同機関が実施してきているオンタリオ州の教育に関する世論調査について聞き取りを行った。

トロント大学とマギル大学のアドミッション・センターでは、入学者の選抜方法と大学生活について資料・情報を収集した。この2つの大学はカナダのトップ大学にランクされている大学であり、前者はオンタリオ州、後者はケベック州にあり、志願の方法は異なるが、どちらも志願者の学力が最重要視されている。大学に入学してきた学生たちは、大学入学時に選択した専攻を変更することは頻繁にあり、大学としては、そのような変更は当初から見込まれていることが分かった。すな

わち、高校卒業時の選択は必ずしも、確定的ではなく、大学における成績、興味、関心によって、学生は自主的に専攻を変更したり、あるいは変更を余儀なくされる。ケベック州では、セジェップという2年間の大学予備課程を経て、大学入学に至ることが特徴的である。このセジェップへ進学するか否かによって、すでに高校卒業時に、大学進学を選択するか否かがスクリーニングされていることになる。

カナダ・オンタリオ州の事例にみられるように、高校での学業成績が大学への進学や進路選択を規定する高大の接続は、生徒の動機づけを高め、大学進学をはじめとする進路選択肢をより適正に見極める可能性と機会を提供している。このようなオンタリオ州の現状は日本の高校教育と高大接続に関して、示唆することは多いと考えられる。

(3)オンタリオ州における大学進学可能性を拡大するための取り組みの実際についても、トロントで聞き取り調査を行った。特に経済的に恵まれない地域、家庭出身の子どもたちにも、大学進学を選択肢の1つに入れ、その実現を支援しようという実践についても情報を得ることができた。まず、現在カナダに11の事務所を置き、トロントを中心に積極的に活動を展開しているPathways to Educationを訪問し、聞き取り調査を実施した。Pathwaysは経済的、文化的、社会的に排除されている地域の高校生、特にドロップアウトする危険性のあるリスク高校生の学習を支援することにより、彼らの大学進学を可能にし、将来のキャリアに接続する選択肢を広げることを目的としている。リスク高校生の居住する地域は経済的にも社会的にも不安定で、治安も悪く、子どもの教育に対する親の関心も必ずしも高いとはいえない場合が多い。そのような出身背景を持つ高校生に対して、学習支援が行われる施設まで通う交通費の援助をはじめとし、学習内容、カウンセリング、大学進学に至るまで、多くのボランティアの参加と協力を柱として、リスク高校生が、将来の自分のキャリアについて希望を持ち、その希望を実現することを支援していることが分かった。このようなPathwaysの取り組みはオンタリオ州において、短期間に高校教育修了率を上昇させることに成功していることが分かった。このようなPathwaysの貢献は州政府にも認められ、現在では、その財源の60%以上は公的資金で賄われている。

また、ライアーソン大学では、経済的、社会的に恵まれない環境のもとにおかれている高校生の大学進学支援を積極的に支援しているChang Schoolにおいて聞き取りを行った。ここでは、学習支援のほか、実際に高校生をキャンパスに迎え、大学を理解してもらうた

めの企画を定期的実施しており、リスク生徒の大学進学機会の拡大に貢献している。このような取り組みは、当初不利な状況下におかれている高校生を憂慮する個人の熱意で始められたものであるが、現在では大学の総意として展開されている。このようなライアーソン大学の支援制度を利用して、実際に進学を実現した学生2人にも話を聞くことができた。学生たちによると、ライアーソン大学の支援のもと、学ぶことに対する動機が高まっただけでなく、それまで悲観的であった自分たちの将来ビジョンをより建設的に設計することができ、さらには大学卒業後のキャリアについても明確な計画をたてるようになったという。このような大学の支援の成果と社会への貢献の実際を知ることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2 件)

- ① 山村滋、佐藤智美、高大接続研究の今日的課題とカナダ・オンタリオ州の高大接続システム、大学入試研究ジャーナル、査読有、Vol. 23、2013、pp. 151-156
- ② 佐藤智美、山村滋、カナダ・オンタリオ州の中等学校にみる学校建設と生徒の進路選択、大学入試センター研究開発部リサーチノート、査読無、RN-11-02、2011、pp. 1-33

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 智美 (SATO SATOMI)
東洋英和女学院大学・人間科学部・教授
研究者番号：80240076

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

山村 滋 (YAMAMURA SHIGERU)
大学入試センター・研究開発部・教授
研究者番号：30212294